

演題名 趣味をきっかけに活動意欲を取り戻し10年間の自宅引きこもり生活から脱した症例

施設名 ケアセンターけやき訪問看護ステーション

発表者 ○神田 幸洋（作業療法士）石神 晴江（看護師）赤迫 亮子（介護支援専門員）
土井晴留香（作業療法士）

概要

【はじめに】

大学中退後職を転々とし58歳から自宅引きこもり生活をしてきた。2年後、原因不明の下垂足症状出現し一時的に歩行困難となる。「自分は歩くことができない」と思い込み活動意欲も低下。また、昼夜を問わず飲酒し転倒を繰り返していた。訪問看護（以下訪看）を利用し趣味の漫画をきっかけに活動的となり引きこもり生活から脱した症例を報告する。

【症例紹介】

U氏 68歳 男性 要介護2 生活保護受給
疾患名:左上腕骨骨折術後

平成24年5月飲酒後に自宅で転倒し左肩粉碎骨折を受傷。1年間放置するが痛みを耐え兼ねて、平成25年8月T病院に入院。左上腕骨髄内釘固定術施行。

退院後、廃用症状増悪が懸念されサービス利用開始となる。（リハビリ 週1回、看護 月1回）。

第1印象:髪は肩までかかりボサボサ。酒気を帯びている。話しかけても視線をそらせてしまう。

性格:質問をしても「はい」「いいえ」と単語での返答のみ。内向的で対人関係が不得意。趣味の漫画については会話量が増える。

嗜好品:酒(焼酎1.8ℓ 2日1本)、喫煙(1日1箱)

家族構成:内縁の妻(以下妻)と二人暮らし、妻は自宅に引きこもっているU氏を心配していた。

日常生活動作:

FIM 98/126点(運動71点 認知27点)

骨折部の可動域制限を認めるが、自宅内ADLは入浴以外自立。しかし、活動意欲の低下から身辺介護が多く、活動量も低下し廃用症状に陥っていた。

【治療(ケア)計画】

#1 飲酒後、バランスを崩し転倒を繰り返している。

#2 活動意欲が低く閉じこもり生活となっている。

#3 内向的な性格から対人関係が不得意。

- ① 生活習慣の改善による転倒防止
- ② 活動意欲改善により近隣への買い物自立
- ③ 社会交流の場への参加(通所サービス利用)

【経過】

訪問開始時は、閉じこもり生活の影響から対人関係に極度にストレスを感じ会話さえままならない状況とな

っていた。そのため、人間関係を構築する目的で漫画の話をする事から始めた。半年程で関係性は構築される。また、屋外歩行も自立レベルに達していた。

しかし、外出への目的もなく閉じこもり生活は続いていたため、さまざまな刺激を入れる目的で、近所の公園に外出し遊具を用いた活動するなど屋外の場を増やしていった。同時期にU氏、妻と相談し漫画や嗜好品は自分で買いに行く事を提案する。初めは外出への恐怖心から渋々行っていたが、次第に外に出る事に自信が付き買い物は日課となる。妻との会話内容もTV中心の話題から公園で咲いていた草花の話、10年前と町並みの違いなど内容の幅も広がる。

内向的だった性格も近所の人に挨拶をする。人前で鼻歌を歌う、虫を捕まえるなど社交的となる。

看護師とU氏の話し合いにより飲酒は週末だけと決め、飲酒量は減り転倒の回数も大幅に減少する。

初めは通所サービスの利用を拒否していたが、平成27年4月竹川病院通所リハビリセンター(以下通リハ)利用開始。通リハにも慣れ、同年11月訪看卒業し自宅近所のデイサービスにサービス移行する。

平成28年7月要支援2となり通リハを卒業する。

【結果】

日常生活動作

FIM 125/126点(運動90点 認知35点)

骨折部の可動域制限残存するが実用的に使用可能となり、自宅内ADLも自立。飲酒による転倒も減り、活動的となり、外出を兼ねた毎日の買い物が習慣となる。

【考察】

能力を考慮すると早々に通所サービスへ切り替えを提案できる症例だった。しかし、U氏の抱える真の問題は内面にあり自宅に閉じこもった事で、社会との交流は断絶し孤立生活となっていた。関係性を構築する上で心がけた事は、U氏ができる事を提案するが「やる」「やらない」は自己決定を促すように支援した。1つの趣味をきっかけに、出来る事が増えて行く事が成功体験となり活動的となった。その結果、U氏らしい生活を再獲得できたと捉えている。訪問開始から2年半の長期的な介入となったが、歳月をかけて気持ちに寄り添うことで社会性を取り戻すことができた症例と考える。